



メタラー弁護士のメタル談義

会員 鈴木 善仁 (67期)



1 メタルとの出会い

私の音楽との出会いは、少し遅く、中学生の時(2000年初頭)であった。

小学生の頃には、「モーニング娘。」や「安室奈美恵」などが流行していたが、典型的ながり勉君だった私は、そういった流行に疎く、音楽よりも授業に耳を傾けていた。

そんな私も無事、中学受験に合格し、中学校で出会った悪友たちからアメリカのプロレス団体「WWF」の存在を教えてもらうのだが、レスラーの入場曲の、あまりのかっこよさに大変な感銘を受けることになる。

流行りのポップスとは異なり、ギター・ベースが鳴り響き、ドラムは激しく、ボーカルはシャウトする、典型的な「メタル」。そんな音楽に、眼鏡君(私)は心打たれたのである。

なお、当時は、海外のアーティストのCDの国内販路も限られており、渋谷センター街にあった「HMV」に無ければ、「Amazon.com」(当時はまだ日本のアマゾンには品数が無かったので、米国本家から取り寄せ)で購入せざるをえないという、今からは考えられない不便さであった。

2 メタラーとしての成長

私の音楽人生は一変し、とにかく「速く」、何よりも「重い」音楽に傾倒していくことに。「METALLICA」などは、聞き飽きるほど聞いた。

また、ただ聞くだけではなく、お茶の水の楽器店にてエレキギターを購入し、夏休みの期間には、真夏に

もかかわらず暖房を30℃に設定し、その中で汗だくになりながら1日8時間練習した。また、速い音楽に耐えられる肉体を手に入れるため、ジムに通い始めるなどした。このあたりから常軌を逸す。親に心配されていたと思う。

3 メタラー集団の一員に

その後続く大学4年間は、特に楽しかった。

メタラーは基本的に、周りに仲間がいないため、孤独である。しかし、大学には音楽サークルがあり、仲間が大勢いる。すると、当然サークルに入り浸るようになり、授業もそこそこに、同じ趣味をもつ仲間たちと、昼夜を問わずバンドに明け暮れ、飲み歩き、時には徹マンしたりを繰り返していた。よく大学を卒業できたものだと思う。

ロン毛で、真っ黒な服に身を包んだ集団が、大学の片隅にたむろしており、気づけば、その一部になっていた。

4 メタラーであることのメリット

しかし、そんな仲間たちも、今では、士業、医師、金融、コンサル、外資系、起業家などなど、華々しい世界で活躍している。私の知るメタラーは皆、世間のイメージとは異なり、礼儀正しく温厚で、某悪魔のように、「お前を蠟人形にしてやろうか」などと現実世界でのたまう者は一切いない。そして、ある研究によると、メタルを聞くことにより、人間のパフォーマンスが向上したという例もあるようで、これもうなずける。

活躍したい人は、「メタル」を聞くべきだ！

5 最後に

コロナウイルスが猛威を振るう前は、年に数回、仲間と集まりライブに行き、その後飲みながら近況を共有していたものである。しかし、今は、軒並みライブは中止となってしまっている。コロナウイルスの影響が落ち着き、日頃のストレスを、仲間とともに、ライブで発散できる日が来ることを祈っている。ビールと音楽は生が一番！